
花街～ヒース～

近江駆琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花街のヒース

【Zコード】

Z02775

【作者名】

近江駆琉

【あらすじ】

『花街』。そこは『外』と隔離された歡樂街。その中で少々他と趣の異なった洋館がある。そこは男女両方を扱う高級娼館『スカーレット』。ヒースはそこで育ち、男娼となつた。彼の過去とは

「あつ…ダメ、ダメよ…ヒース。んあつ…」

婦人と言ひ表すのが最も似合ひの女性が今日の客。

「ダメ?…どうして…僕にされるの嫌?」

仕事なんだから相手を楽しませないといけない。俺は手を止めて言った。

「もうじやないつ…感じすきひやうの。だから、やめないで…?」

「良かつた…」

俺が再開すると彼女は甘えるように身体をすりよせってきた。

(かわいいなあ…女性って)

仕事の度に俺はそう思つ。

「よつ…お疲れ、ヒース」

「ん…?ああ、コリウスか。そつちも終わったのか?」

さつきの婦人を車までエスコートして戻つてみると、同僚のコリウスが声をかけてきた。

「いや、俺はこれから。お前はもう終わり?」

「今日はあと2人。じゃ、準備しなきゃだから……また

「さすが売れっ子だな、頑張れよ」

俺は次の客を迎えるためにシャワーを浴びに私室に戻った。

部屋に戻るとすでに寝室は整えられていて、先ほどの情事がなかつたことのようである。

(次の客が詰まつてゐるんだつけ…急がないと)

俺は急いで汗を流して着替えた。

(次は…まい...)せんか。じゃあこの間作ってくれたスースにしよう)

俺はタイトなシルエットのブラックスースに白のシャツ、黒のタイを身につけエントランスホールへと今日2度目の出迎えに行つた。

俺がいる娼館『スカーレット』は花街『露宮』の中でも高級娼館であり、中世のヨーロッパ風に造られた重厚な建物である。

娼館といつてもここに居るのは娼婦だけではない。半分は男娼、年齢も17～50歳に近い男娼までいる。

そのため訪れる客も様々であり男娼を買う男も娼婦を買う女もいる。

同性の客を受けない奴もいるが、俺の客は2対1で女性が多い。

今日の客3人も全員女性だった。

「あー…疲れた」

3人目を送り出してから俺はダイニングルームで机に突っ伏した。

「なっさけないなー、若いんだからもつと頑張りなさい！…まだ17歳なんだから1日に5人や6人位平氣でしょ？」

頭の上で誰かが話していた。同僚の娼婦でたるアイラである。

「俺、もう18だし…若いとか若くないとかじやなくて、これは向き不向きだよ。俺は3人が限界…アイラみたいにそんな人数を相手にできない」

「生意氣ねー、本当に。そんなんじや、これ、渡さないわよ？」

顔を上げると「アイラが持っていたのは一通の白い封筒だった。

「…誰から?」

スカーレットでは自分の客や身内以外の『外』の人間との私的な連絡は出来ない。

そのために客に手紙を託すことで密かにやり取りをしたりしている。「心当たりはあるでしょう?用心深いわね…大川様からお預かりしたのよ」

「りょーかい…ありがと」

俺はアイラに仕事用の顔で微笑んだ。

「あーあ…無邪気な笑顔、あんたのお客様はその顔に騙されてるわ。疲れないの?」

「これも俺だよ、別に疲れたりはしない。じゃあ、俺もう寝るね。おやすみ…」

時刻は深夜2時。今日は早めに眠れそうだ。

「ハハハ…

「う、ん…」

ノックの音で戸を開きました。

（…今、何時だ？）

俺たちの部屋は昼間でも仕事がしやすいように厚いカーテンが掛けているため、カーテンを閉めてしまつと明かりが入りにくい。

（5時半…寝よ）

非常識な時間なため、俺はノックを無視して再び枕に顔を埋めた。

ドンドン…ドンドン…ドンドン…

そのとたんにノックと二つには荒つぱくドアが叩かれた。

仕方なく起きて寝室を出る。

（誰だよ、こんな中途半端な時間に…まさか誰かの客じゃないだろうな）

「はい、どなたですか？」

俺はドアを開けずに返事をした。

「ほんな時間にすみません、警察の方がいらっしゃってヒースさんにお会いしたいということです。急いで管理室に来てください」
「どうやらノックをしたのは館の職員のようだ。

「わかりました。10分ほどお待ち頂きたいと伝えて下さい

そう答えて俺は身支度にかかった。

（警察ねー、最近変わった客なんていたかな？ってかわざわざこんな時間に来なくともいいだろ）

仕事がら警察が聴取に来ることは珍しくないのだ。
管理室に行くとどうやら呼び出されたのは俺だけじゃないようで、
コリウスにアイラ、他にも数人がいた。

「おはよー、ヒース。せっかく早く仕事が終わったのに残念ね」

言葉とは裏腹に嬉しそうな表情でアイラが言った。

「本当にね…」

そこに警察官が2人表れた。

「こんな時間にお呼び立てして申し訳ありません。実は昨夜未明に殺人事件がありまして、その容疑者についてお話を聞きたいのです」

「つまり容疑者がうちの客ってことってか逮捕はすんでんの？」

ゴリウスが尋ねた。

「 もうです。逮捕についてはまだで、現在捜索中です。容疑者は…」

話をまとめると、ビルやアパート容疑者はゴリウスの客だが呼び出された俺達とも面識のある男であり、居場所や動機についての情報を集めに来たらしく。

「 何が」存じではありますんか?」

(そんなこと言われてもな… ゴリウス以外は親しくもないし)

案の定ゴリウスも含めて皆特に思いあたるふしが無いようだった。

「 残念ながら特にないです。俺のところでもあまり話をする人じやなかつたし…」

代表するようにゴリウスが答えた。

「 もうですか… じ協力ありがと、ございました。またなにか思い出したら」連絡下さい」

やつて警察官は帰つていった。

「 殺人ねえ… 特に変わった客でもなかつたし、そんなによく来てたわけでもないからな」

ゴリウスが言った。

「逮捕がまだつて言うのが嫌だね。たまに勘違いな客がいるからさ

俺が言うと周囲も同意した。

花街は閉鎖的のために潜伏しやすい。その上に客のなかには『俺とお前のなかだらう。俺が逮捕されたら嫌だらう!』などと言い出す勘違いな人間もいるのだ。

「確かにね……気をつけるよ」

「じゃあもう部屋に戻つてもいいかしらね?」

アイラのこの言葉をきっかけに解散となつた。

結局この容疑者は1週間ほど後に逮捕されたと連絡がきた。

「いらっしゃいませ、優香さん。お待ちしてましたよ」

この日も俺はいつものように仕事をしていた。今日の客は常連のご婦人が2人、新規の客が間に1人含まれていた。

「ちょっと久しぶりになっちゃったわね。私に会いたかった、ヒース？」

「もちろんですよ、待っている間今日は何をしようかと考えてそわそわしてました」

女性の多くは雰囲気を大切にしながら求められる事が好きなため、深読みさせる言葉を選ぶ。

「クスクス…楽しみにしてるわ」

「ではお手を貸す。部屋に行きましょ」

外はまだまだ昼間の様子を呈している。

部屋につくと俺はアフタヌーンティーを用意して話を聞くことにした。

「ねえヒース?少し見ないいうちに背が伸びた?」

「ええ。もうそろそろ打ち止めでしうけどね…もう少し欲しかったなあ」

「俺の身長は一七五cmほど。田標は一八〇cmだがさすがにもう伸びないだろ?」

「ヒースくらいが一番いいわよ、高めだけど、高くはないって所がね」

「そうかなあ……あと5cmくらい伸びたらいいのに」「あと5cmあればキスする時に優香さんが背伸びしてくれそうなのにな……」

「ほそつとほそつとなぜか優香さんはクスクス笑い出した。

「あらあら、そんな理由なら大丈夫よ? 今だつて背伸びしてあげるわ」

「じゃあしてよ。ほら、立つから」

俺が彼女の隣に立つと、彼女も立ち上がって俺の首に腕をまわしてきた。

「んつ……」

「うううう……ううう……」

ぬれた音をたてて深いキスをする。

優香さんが頑張って背伸びをしてくれていて、いつもよりかがまな
くていいく。

「うんつ……ヒース……苦しつ……」

しばらく深いキスを続けていたが優香さんが音をあげた。

「…っはあ…ねえ、久しぶりすぎて足りないよ。…どうしてくれるの?」

俺は少し拗ねたように言つた。

「もう…まだ明るいのに…でもいいわ、好きなだけあげる…」

そう囁きながら彼女は身体を刷り寄せてくる。

「…」いいの?意外と刺激的なのが好きなんだね…貴女のきれいなところ、全部見せて…

明るい居間で俺は彼女を抱いた。

まさかその光景を見られているとも思わず。

優香さんを見送つてすぐに新規の客を迎える準備をし始めた。資料をみながら服装や話し方を考え、客の望むヒースを作つていくのだ。

（氷室あかね、氷室財閥の娘令嬢ね。年は…18歳…こんな年から花街に出入りか。しかも同じ年…やりにくそうだし面倒くさいな…）

若い女性の中には花街をホストクラブのようと思つてゐる者もいる。

「勘違いされないように…一切プライベートは話せないよ」としないとだな…服装は地味なスーツでいいか

悩んだ末にビニール袋にこもるサラリーマンのよつた服装で出迎えに行つた。

エントランスホールに着くと既に客はソファーに座つていた。

（早いな…まだ予約の時間まで20分もあるのに…）

そこへ受付の男がそつと声を掛けってきた。

「ヒースさん、あの女の子3時間位前から居たんですよ…外の庭園を歩いたりしてたのですが…1時間位前にあそこに座つて。それに、すごく怒つてました…気をつけて下さい」

「うわー…前途多難だな。わかった」

俺は覚悟を決めてしつかりと営業用の笑顔を作つて女の子に声をかけた。

「お待たせしてすみません。氷室あかね様ですね？僕がヒースです、スカーレットによつ」…

卷之三

俺が最後まで挨拶をする前に急に目の前の少女が叫んだ。

あなたは私を待たせて何をやつてたのかしら？？」「

「お待たせしたのは大変申し訳ありませんが、お約束の時刻は7時でしたよね？」

俺は彼女が怒っている理由がわからなかつた。

「そんなの関係ないじゃなの！！あなたは私に買われたのよ！？
なのに…あんな品のないおばさんと勝手にセックスして…
ねえ、どうこういと！！！」

（庭園から部屋を覗いてたのか？最悪だな…勘違いも甚だしい…）

彼女の様子から俺は顧客として認められないと判断した。

「どういたしまして… 申訳ありませんが少々お待ち下さい」

俺は受付に事情を話に行こうと彼女に背を向けて。すると彼女は態

度を一変させ背中にしがみついてきた。

「うわっ…どう…」

「やだ…行かないで…ねえ、怒つたの?「ごめんなさい、謝るから行かないで…あなたが好きなの」

（くそつ…最悪以下だろ…どんな教育してるんだよ…）

人の出入りが多い時間のエントランスホール、周りの人々が横目でヒース達を見ていく。

「怒つてなどいません、ですから落ち着いてソファーに座つて下さい」

再び優しそうに見える笑顔を作つて言つた。とにかく受付に状況を伝えて早急に帰つてもらわなければならぬ。

「ねえ、本当に怒つてない?ねえ…」

ソファーには座らせたが彼女は俺の腕を掴んで離さない。

俺が困つていると館の職員が来るのが見えた。

（誰かが手配してくれたのか、助かつた…）

職員が穩便に済まそようと話しかけるが彼女が騒ぎたてたため、残念ながら拘束されて連行されていった。

「ちょっと…なにするのよ…離して…ヒース、助けて…」

「私に会いたかったわよね？私の事好きでしょ？…ねえ！！」

連れられていく彼女に俺はすぐに背を向け管理室に報告に行つた。

「ハニツ事もたまにはあるため、ハニツハニツとでもない。

「大変だったわね…大丈夫?」

俺が報告を終えて部屋を出るとアイラが廊下で待っていた。

「アイラが職員を呼んでくれたのか、ありがとう。助かつたよ」

「どういたしまして。時間があるなら私の部屋でお茶でもどう?少し休んでいきなさい」

時間をみると次の客の予約まではまだしばらくあった。

「女性からの誘いを断るほど野暮じやないよ、ぜひお邪魔させていただきます」

するとアイラも艶やかに微笑み返してきた。

「あら、女性ならどんなたぐいのかしら…?貴方だからお誘いしたのよ」

「ではお手をどうぞ」

俺たちはふぞけながら部屋へ行つた。

部屋ではアイラが自ら暖かい紅茶を入れてくれた。

「なんだか懐かしいな、こうしてアイラの部屋で過ごすの…」

「そうね、あなたが小さな頃はよく遊びにきてくれていたから」

「アイラがこの館に来たのは俺が9歳の時だった。アイラは既に18歳ですぐに客をとり始めていた。

「俺もあの頃のアイラと同じ歳になっちゃったよ。アイラみたいにはなれないけどね…ま、あれだけ働いてたアイラが特殊なんだろうけど」

「あの頃はね…若かったから。あなたはあなたで大変みたいね?」

アイラは昔から俺を弟のようにしててくれる。

「まあ、そうだね…毎日仕事が詰まつててつらいよ。それに…今日みたいな新規の客が最近少くないんだ」

「この前モデルとして雑誌に載つたからね。あれで花街を知らない子が訪ねてくるのよ」

この間客の一人にモデルを頼まれ、若い女性むけの雑誌の仕事をした。

そういう仕事は基本的に禁止されているが、今回は大口の客からの頼みで断れなかつたのだ。

「あーあ…もう絶対にしたくないよ

しばらくアイラと話していたが、次の客の予約の時間が迫つてきた。

「じゃ、仕事にいくね。いつもありがとう、アイラ」

「いいえ、いつてらうしゃい。また時間があつたらおいでなさい」

俺がアイラの部屋をでると偶然シリウスに出会った。

「よお、アイラの部屋から出でてくるとは…ずいぶんといい思いして
るな」

「嫉妬か？シリウス」

俺はにやつと笑つて言つた。シリウスはアイラが好きなのだ。

「なんの事だか…ま、せいぜい勘違い女に誘拐されないようにな

シリウスはそう言つと去つていつた。

「ううせ…だから氣をつけて館に軟禁されてんだよ

モデルをしたせいでストーカーにあつてているのため、俺は外出禁止
中なのだ。

部屋に戻つて地味なスーツから次の客のためにカジュアルな服に着
替え、仕事モードに切り替える。

「さて、行くか…」

今日最後の客をいつも通り送り出す頃には、前の客の事など気にか
けていなかつた。

「はい、私からのラブレターよ」

ある日の午前。俺がアイラの部屋を訪ねたとたん、不遜な態度で一枚の封筒を渡して寄越した。

「うわ……そんな態度で渡されても可愛いだけの欠片も見いだせないよ。ありがとう、後できちんと読んで返事をすればいい?」

俺はその封筒を受け取つてそつ返した。

「ええ、いい答えを待つてるわ。……ちょうどよく訪ねてきたから先に私の用事を済ませたけれど……あなたの用事は?」
「

「あのそ、ちよつとでいいから館の外に出たいんだよね。……アイラからオーナーに頼んでみてくれない?」

スカーレットの経営者及び管理者、オーナーと呼ばれる彼とアイラは仲がいいのだ。

「嫌よ

きつぱつと即座にアイラは言った。

「…無理、じゃなくて嫌?」

「そう、私は今あなたを館の外に出す事に賛成できないもの。まだ

あなたの評判は消えてないし、ストーカーらしき子も報告が来てる
でしょ？」

「でもう…もう1ヶ月だよ？俺だつて遊びに出たいんだよね

花街にも映画館やカラオケなど娯楽施設がある。俺はどうしても最近公開された映画を見に行きたかったのだ。

俺が外出したい理由を言つとアイラはため息をついた。

「はー…まだまだお子様ね。自分の身体が商品、しかも高級品だつて自覚してるの？」

とにかくだめ、もう1ヶ月位は我慢しなさい」

「あー…ストレス溜まるな」

俺は外出を諦めてソファーアーに体を埋めた。

「…少し休みを取つたらどう？毎日予約でいっぱいみたいだし、無理してるんじゃない？」

そんな俺にアイラが心配そうに言つてくれる。

「いや…仕事は休みたくないから。俺は少しでも早くこの街を出たいんだよ。わかってるだろ？」

「…まあ、頑張りなさい」

アイラはただそう言つて俺の頭を優しく撫でた。

今日の最後の客は優香さんだった。

「ん……ふあっ……」

月明かりに照らされたベッドの上で彼女は艶やな息を漏らしている。

「ひゅっ……ひゅっ……

生白い胸の先端を口に含み吸いつ。

「あん……もひ、やめ……」

先ほどから俺は彼女の他の場所には一切触れずに薄く色付いた突起を責め立てている。

「……やめ……めんね、優香さんが何を言いたいのかよくわかんな
いや……んっ……」

俺は口を離さないまま答えた。

「だ、から……はあっ……もひ、や……やああ……」

彼女が言いつぶれる前に俺は一気に彼女の中に指を埋めた。

「優香さんのなか、ほんとに気持ちいい……」

「ヒース… うんうつ……」

少し身をよじつて彼女は声を抑えている。

優香さんは基本的にいつもひつひつて自分を抑えることが多く前回のように喧嘩、しかも寝室以外での行為はほとんどしない。

(やつぱつ田頃大変なんだつな… 政治家の妻つて)

「ねえ、優香さん?」

俺はそんな彼女に真摯な顔で囁いた。

ぐりゅう… ぐりゅう…

囁きながらも指は彼女の中を蹂躪し続ける。

「んつ… なに、ヒース?」

「…… 酷くしたくなつた

「えつ?… あつ… ちよつ、ヒースつ… ん、あつ、あつ…

ぐりゅう… ぐりゅう…

「はあつ… 本物こい声… 壊したくなるよね…?」

俺は彼女の唇を深く犯しながら中を押し広げて自身を進めた。

「やあつ、あ… あああああつ…」

「けほつ……んー」

寝室で抱き合つてぐつたりした彼女を俺はバスルームに運び、再び強引に抱いた。

声を出し過ぎたのだろう。先ほどからたまに咳をしてくる。

「……」めん、優香さん。身体大丈夫?」

再び寝室に戻つて寄り添つと、ゆっくりとした時間が流れる。

「……ちよつといひ……」

「いめんね?」

「……」めん

まだしめつてこの髪に指をからませると、すねたように払われてしまつた。

「すつ」怒つてゐるわけじゃないわよ、すみませんといつてこじめすがひつ

たかしげ

よほび情けない声だったのだろう。彼女はくすくすと笑い始めた。

「でも、どうしてあんなことしたの?」

「…聞いたくなかったて言ったなら？」

理由はもうひるんあつたし、自分の欲求のままに暴力的な行為ではなかつた。

「やうね…聞いたくない気持ちはわかるけれど、私としては聞きたいわねえ。…もし言わないかつたらじばりへりは来ないわ」

「…声を抑えてる優香さんを見たら、いろいろ想つた。それだけつ」

「…こんなつて？聞きたくなるなあ…けほつ」

彼女はここにしながらわざとらしく咳きこんだ。

「…だからつ、僕のところにいる時くじこせ、もつと自由にして欲しいなつて…！僕に対してもバリアがあるんだつて思つたら、壊したくなつた。…そのバリアと、優香さん自身を…あー…ほんつとに恥ずかしいつ…！」

「…ありがと、ヒース」

「…今日、またか」これから帰るとか言わないでしょっ隣で寝つてよ

「うそ…おやすみなさい」

じぱりくすむと小さな寝息が聞こえてきた。俺は体を起して寝室を出る。彼女は一度寝てしまつとなかなか起きない。

「はあ…疲れたな」

厚いカーテンを開けると、濃紺の空に光が明るく輝いている。

「… ゆうか、 悠華つ…」

実はさつき彼女に言つたことが今日の態度の全てではなかつた。

午前中にアイラから受け取つた手紙を読み返す。

「… はつ、ほんとに馬鹿なのは俺だよな…」

あこつと同じ名前で、何となく似たような態度をとる彼女に、俺は『ヒース』でいられなくなつた。

彼女にとつて俺という存在は何の障害もなく美しい羽を思い切り伸ばせる場所であつて欲しいと思っていた。

あこつとつても。

…

「ヒース…？」

心地よいふわふわとした感覚のなか、俺を呼ぶ声がする。

「……」

優しい手が俺の顔に触れてくる。

（ああ、このまま時が止まればいい…）

なんだか暖かくて、優しい…懐かしい夢を見ていたような気がする。顔に触れていた手が離れていくのが嫌で、無意識に俺はその手をつかんだ。

「あら、起きちゃった？」

目を開けるとアイラが残念そうにしていた。

「今ブランケットを取りに行こうとしたところなのよ

…そうだ、アイラの部屋に来ていたんだった。

「…」めん

俺が握っていたアイラの手を離して置つとアイラは優しく微笑んで

言った。

「何が？」

「…寝かけつて」

「とにかく一番それらしげ嘘を吐いた。自分でもビリしてしまなんて言ったのがわからなかつた。

「ふふっ、本当にあなたは嘘がへたくそね。それでしつかり客が取れているのが不思議だわ」

「アイラはなにうつと俺が寝ていたソファーを離れていく。

「はい、じうん。こんなことうで寝て身体冷えたでしょ、あつたかいお茶でも飲みなさい」

「ありがとう…」

アイラの入れてくれたお茶を一口飲んでまつと息をつく。

「…最近、調子がよくないみたいね」

アイラのその言葉に俺はびくつとしてしまつたが、それを隠して答えた。

「…それほびくつのこと?」

「両方よ。…特にあなたかしづ」

「……ひつよね、疲れてるんだ

優香さんを抱いたあの日から一週間、ずっと俺は悩んでいた。

「あいつのことはもういただだか、仕事のまついでも本当にまつちやつよ…毎日毎日…」

俺に付きまといっていたストーカーは減ったが、その分たちが悪くなつていた。

「ほかの客に迷惑かけるなんて…花街のルールをなんだと思つてゐんだろいな」

「噂は聞いているけど大変ね…そんなんがあなたに毎日客を取らせるオーナーはどうかと思つけれど

怒つたまゝアイラは言った。

「あの子の方はどう?..」

「……」

俺が答えないでいるとアイラは俺の頭をなでて言った。

「……すこし、仕事は休んでみる?…あなたが望むなら私から頼んであげるわよ」

その言葉に俺は驚いてアイラの顔を見つめた。

仕事には厳しいアイラがそつとほどに今の俺は不安定なのだと気づいた。

「休んだら、意味がないんだ…」

「そんなこと言わないの。せめて今日だけでも休みなさい。いい？」

「…アイラは？」

「私はもともと今日は休みだったのよ。やつへつしてこないな
やつへつしてこないな」

そう聞いてアイラはオーナーの部屋へ電話をかけに行つた。

(…アイラが今日ちよつと休みなんて、そんなわけないのに)

俺はアイラの言葉に甘えて、少し冷めてしまつたお茶を飲んだ。

その日は結局一人でアーティストの部屋で過ごした。

「ねえ、泊まつてもいい?」

「のまま一人で眠りたくないで俺はアーティストに頼んだ。

「いいわよ、別に。あなたと眠るのなんて本当に久しぶりね

「そりゃそりゃだろ、俺だつて思春期つてやつがあつたんだから」

俺が客を取り始める少し前、アーティストにこじはり苦痛になつた。別にアーティストに恋心を抱いていたわけではないが、弟のようになつて接していくアーティストの行為に素直に甘えられる様な時期ではなく、一緒に過ごす時間は減つた。

もちろん売れっ子のアーティストの夜があいてこることが少なかつたせいもあるのだが。

アーティストのベッドで隣に横になると、アーティストは俺の髪に指を絡ませてきた。

「…ねえ、毎晩ソファーで眠つていた時、あなた泣いてたわよ」

「…どうしてだう?ね?」

俺がなんでもないよつて答えるとアーティストは困つたように微笑んだ。

「あーあ……どうして私のかわいい弟くんはこんなにかっこいい男になっちゃったんでしょうね? ゼーんぶ自分で抱え込んで、誰にも頼らなくて」

「すつと、素晴らしいお姉さんを身近で見てきたからね」

俺が微笑んで答える。

「……そんなことを言って。あなたがもつとダメ男になるよつと振る舞えばよかつたわ」

そう言つてくすくすと笑いだした。

「…ね、アイラ」

「ん…なあに?」

「…ありがと」

「…ほんとになんと大人になつたのね、少しさみしいわ」

俺は疲れていったこともあり、話しながらも瞼が重くなつてきた。

「…と、思つたけどやつぱりまだお子様かしら? 我慢しないで寝ちゃいなセー」

「ひとつする俺を見てアイラは微笑みながら寝かしつけるように頭を撫でる。

「うん、おやすみ。アイラ……」

そんな心地よれに包まれて俺は眠りこついた。

翌朝あんな事が起きるとも思はず……

「……なあ……」

「……は？ 部屋に……こな……ど……」

廊下の騒音で俺が皿を覚ますとすぐにアイラはいなかつた。時計を見ると9時。そろそろ昨日の泊まりの客が帰り、一番静かな時間のはずである。

「おはよー、ずいぶん騒がしいけど……何かあったの？」

ロビングへ行くとアイラは緊張した様子で電話をしていた。

「おはよー、今起しこ行こうと思つてこたのよ。はー、オーナー
かりぬ

そつまつて俺に受話器を差し出してきた。

「俺に？」「

わざわざアイラの部屋にまでかけてくるなんて、何の用事だ？ ついながら俺は受け取つた。

「はー、ベースです。おはよー、やあこまか

『ああ、おはよー……館の中が騒がしいのはわかっているな？

「ええ、もちろん……何か俺にかかる」とですか？』

こんな騒ぎを起こすような密に覚えはないが、オーナーの話しぶりからして俺がらみのようだ。

『実はさつき受付に氷室財閥のお嬢さんがきてな…お前に会いたいと言つんだ。もちろん断つたんだが、すると妙な事を大声で言い出した』

「はあ…」

俺はその子の顔を思い出さうとしたが、思い出せなかつた。

『お前がこの館に監禁されている、と言つ出したんだ』

「へー…よく知つてますね、その子。実際、もう一ヶ月以上は監禁状態ですもんね」

『真面目に聞け。…で、警備員の制止を振り切つて館内をお前を助け出すために走り回つているんだ。一応氷室財閥のお嬢さんだからあんまり手荒なまねもできなくてな…というわけだから、部屋から出るなよ!! ドアにも…一応窓にも鍵をかけてカーテンも閉めておけ。わかつたか?』

「はいはい、りょーかいです」

俺が電話を切る頃にはアイラがしっかりと鍵や、カーテンを閉めていた。

「あーあ…せつかく今日から頑張りつつ思つた矢先にこれかよ…」

相変わらず廊下からはバタバタと足音が聞こえたりしている。

「本当に災難ね。どんなお密さんだったの？」

心配そうにアイラが尋ねてきた。

「密じゃないし……顔も思い出せないよ。勘違いしたただの女の子」

「……早く捕まえて欲しいわね。この部屋には入れないから大丈夫だとは思うけど……」

「そうだね……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0277s/>

花街～ヒース～

2011年8月16日23時21分発行